

Trailokyavijayamahākalparāja に於ける 金剛薩埵について

中 塚 浩 子

はじめに *Trailokyavijayamahākalparāja* (P.No.115, D.No.482 以下 TLV) は、『真実攝経・降三世品』の釈タントラであると云われる瑜伽タントラである。大正蔵経の中には部分訳が二種 (No.1172, No.1173) 残されている。

此のタントラは、かねてから無上瑜伽への中間段階の資料として重要なものと考えられているが、その内容についてはあまり研究がなされていない。

幸いに唯一であるが *Muditakoṣa* の *Ārya-trailokyavijaya-nāma-vṛtti* (P.No.3332, D.No.2509 以下 TLV_{vṛ}) が残されているのである。

今回は「金剛 *hūṃ kāra*」と「金剛手の章」を採り上げ、そこに説かれる金剛並びに金剛薩埵について TLV_{vṛ} ではどの様に釈しているのかを見る事による考察を行いたい。

1. 金剛薩埵は知られる様に密教の根幹をなす尊格と目される菩薩であるが、その手に持する金剛に与えられる定義に伴い金剛薩埵そのものの定義も様々に変化をなしているのである。

古来、vajra (金剛) は、強力な武器であった。その金剛が仏教に取り入れられ、堅固・空性・普賢などの定義が与えられていく。

『大日経』に於いて金剛薩埵は菩提心堅固な真言行者から十九執金剛の上首・執金剛秘密主として大日如来の対告衆となるのであり、更には瑜伽経典『金剛頂経』では大日如来の眷属中、最勝第一の地位に住する姿が説かれているのである。

1. 1. TLV「金剛 *hūṃ kāra* の章」和訳の抜粋

曼荼羅に入らず、或いは三摩耶を棄てるものは、秘密を正しく知らないから金剛 (位) を成就せず。具徳金剛薩埵 (の自性) は欲である。貪染と金剛は真実であり、それ (真実) に貪染しなければ金剛手は成就しない… (P.9a5 ~, D.9a1) 金剛 *hūṃ kāra* 印は、金剛縛である。右手に金剛杵、左てには花の弓と矢を持し、微笑し齒を露わす怒りを伴なる顔で… (P.9a5 ~, D.16b6 ~)

十一ヶ月によっては十一地の仏地を得、十二ヶ月によっては持金剛 (位) を成ずるのである… (P.9b5 ~, D.17a6 ~)

1. 2. TLVvr「金剛 hūm kāra の章」の和訳 (太字は TLV)

秘密を正しく知らないから、とは、金剛手の身と口と意において秘密の真言 (義) を知らないものは金剛手 (の位) を成じないのである。その秘密とは欲を棄てるなど説かれ、また、欲とは具徳金剛薩埵 (の自性) は欲である、と云うなどである。

秘密とは、総てのものが知れるものに非ずして、(総てのものが) 対象とはならないのである。

具徳は欲の薩埵である、とは、具徳金剛薩埵の本質は欲である、金剛薩埵の一切の智慧の自性も、一切の世間・出世間の有情の大樂の原因たる欲と共なることと等しいから欲というのである。欲とは、貪染でもあり、有情を成熟なすことや、解脱なすことに染着する故に、欲即金剛でもあって、空性を認識する智慧なる金剛であり、それ (金剛) は他者によっては不壊であり対治するものを決定的に破滅するから…智慧なる金剛である。

花の弓というのは、具徳 (金剛薩埵) が欲を自性としているから花を携え、と説かれ象徴である弓〔方便〕と箭〔般若〕を伴るのである。欲の自性を示すため笑い、忿怒の自性を示すため牙を出すのである。

十二ヶ月においては執金剛となる、というのは、金剛薩埵そのものが、一切仏の智慧なる大毘盧遮那の本質を有しているから、普学者地〔十二地〕と説かれ、一切薩埵の中の第一は金剛薩埵であるから最勝とも説かれるのである。(P.259b3 ~, D.227b5 ~)

このように、「金剛 hūm kāra の章」に於ては、秘密と欲と忿怒という方便性が強調されている。このタントラに説かれている真実義というものは、誰もが理解出来るものではなく、理解し難いものである。故に総てのものに対しては示されない、と秘密性と特殊性を強調している。

欲というのは、有情を成熟なす事や、解脱なす事を願う欲であり、世俗に着していく貪染であって、如来の自性たる般若を持する智慧薩埵 (jñāna sattva) が堅固なる欲を以て、どこまでも有情に着していく〔不染而染〕の方便門が説かれている。「欲即金剛」即ち「煩惱即菩提」は、本タントラに於ける重要定義である。「欲とは菩提心である」と釈されていて、金剛薩埵の本質がその欲であるから欲の薩埵なのである。この金剛手が欲を示すために微笑し笑い、忿怒を示すために牙を露出するという「無忿怒而忿怒」の方便がここに示されている。

左手には、般若と方便の象徴である箭と弓を持している。その弓を飾る花は欲の象徴であると述べている。この様に、ここには般若と方便の両金剛を執する忿怒の執金剛・金剛薩埵が説かれている。その金剛薩埵は一切仏の智慧なる本質を持つ者であるから、普覚地〔十二地〕たる執金剛位に住する者である、と云うのである。

2. 1. TLV「金剛手の章」和訳の抜粋

次いで成就の出現 (が説かれ)、曼荼羅に入らない者や、三摩耶を知らない者や、弟

(92) *Trailokyavijayamahākālparāja* に於ける金剛薩埵について (中 塚)

子に非ざる者に対しては…理解し難い心真言を授与してはならない。

中央には毘盧遮那、その右には四臂の金剛手の心・口から意生する如くに描く…二手には赤色の花で満たした弓を… (P.21b3 ~, D.31a2 ~)

Bhaga に頭指を挿入し、一万遍誦すならば… (P.24b3 ~, D.31a2 ~)

金剛手の御前で大印を縛し、大曼荼羅に安住して金剛念誦による金剛語を一千百回誦すれば、一切悉地と一切円満と一切友誼と一切作業をも成ずる事となる…

欲主と自在者と施事者と安穩者と無尽に存続する者〔と共なり〕、一切欲を享樂し一切樂と意樂を利養しつつ得て、一切有情を利益なす事や安樂を成ずる施者となり…

hūṃ 字をもってまた一切如来を攝受し… (P.25a7 ~, D.31b ~)

2.2. TLV_{vr}「金剛手の章」和訳 (太字は TLV)

ついで成就の出現とは、四曼荼羅を説くと云う事である。成就には、支分の勝れた弟子は器として相応しく、曼荼羅に依止せしめ成就に引入すれば(弟子の)利益になるからである。それ故、非器にに対して真言は授与しないというのは、未入壇者云々などである。儀軌の通りに曼荼羅に入っていない者や、入壇しても四部の共通の三摩耶と各部の三摩耶を知らない者や、曼荼羅に入らず(弟子に非ざる)他者などに真言の真髓は与えないということである。

理解し難きと云うのは、真言の真髓は理解し難きものであり、得られれば福德と智慧が無量に生ずるからである。

中央に毘盧遮那を描きその右に金剛手とは、〔世尊の〕胸から意生した真髓である欲と忿怒〔を自性とする金剛手〕の姿であり、色は赤で四臂である。二臂で箭弓を張り、二臂で金剛 hūṃ kāra の印を二頭指を立てて展ばし屈する〔姿〕で住する者を描く。

花の弓とは花で飾られた弓の事であり、方便と般若の標幟である。

御前に同様にとは、毘盧遮那の御前には、欲と忿怒を自性とする金剛手であり、それ等を描くのである。

bhaga に指を挿入して十万遍唱えればとは、bhaga とは一切障礙を破壊することで、自ら解脱せんとする標幟である象徴に対して云うのである。padma に頭指を挿入して誦すことである。

欲主と自在者と施事者ととは、先に金剛手の御前で大印を縛し、大曼荼羅に住して唱えた果であり、欲とは菩提心である。それ(欲)を主として行ずるから主である。また、五欲樂を自在にするから主と云う。

hūṃ 字を以てまた一切如来すらも攝受しとは、金剛 hūṃ kāra の大印の瑜伽をなし心真言 ṭakkī hūṃ ja を唱えれば、一切如来の自性たる福德と智慧の一切資糧を執持する事となり三界の主となるのであって、忿怒の姿の金剛手が第三眼を得るものとなるのである。(P.276a3 ~, D.243a2 ~)

「金剛手の章」に於ける特徴としては、器を問う、三摩耶を知れる三摩耶薩埵、bhaga とは蓮華であり一切障礙を破壊するもの、それに、心真言 ṭakkī hūṃ ja, が擧げられる。真言の真髓は理解し難い。しかし、得られれば無量の福德と智慧が

生ずるものである。故に、これ（心真言）を授与されるべき弟子は、支分の優れた者が相応しい、と説く。このことは、『金剛頂経』に於て「弟子の器非器は簡擇せず」と説かれている事と大きく異なるところである。ここには、秘密性、特殊性が示されていると見る。しかし、三摩耶を護らなければ無間地獄に墜ちるとの厳しい誓いも付すのである。

bhaga とは、一切障碍を破壊するものであり、解脱の標幟の象徴であり、padma である。その蓮華は水に着して汚泥に染まらぬ如く、どこまでも世俗に着しながら染まらぬ「不染而染」の赤であり、それは愛の赤であり、又忿怒を伴なる赤色でもある。世俗に着し衆生救済の欲をもつ菩提の人、菩提薩埵・金剛薩埵は、一切如来の福德と智慧の一切資糧を執持するものであり、ṭakkī hūṃ ja という愛と忿怒を伴なる心真言を誦すれば三界の王となる、と説いている。

以上、二つの章からは次のような定義が導き出される。

〈金 剛〉空性・不壊・秘密・〈金剛薩埵〉欲の薩埵・忿怒の薩埵・三摩耶薩埵・智慧薩埵・〈箭 弓〉般若と方便

おわりに 金剛の定義である不壊・秘密・忿怒については冒頭でも述べた如く、金剛の根源的定義であった。本タントラではそれ等に対して、より深い解釈がなされてるのが解る。密教の真髓である心真言は理解し難いものであり、得られれば利益は無量である。故に、それらを授与されるには器が選ばれるのである、などと特殊性に加え優位性が伺われるのである。

「欲即金剛」即ち「煩惱即菩提」は、このタントラに於ける最も重要な定義の一つになっている。「欲とは菩提心である」と釈されており、欲とは堅固な菩提心であって、その欲に貪染する故に、「不染而染」である。その欲が金剛薩埵の本質であるから欲の薩埵であると云う。如来の本誓を我が本誓とし、有情に染着し世俗に関わり衆生救済に向かう三摩耶薩埵、如来の智慧を自性とし般若の忿怒を伴なる智慧薩埵、この両者を備え持つ者が金剛薩埵であり、「不染而染」「無忿怒而忿怒」の二方便の象徴を両手に執し、愛と忿怒の心真言「ṭakkī hūṃ ja」を唱える、三眼を得た金剛薩埵・降三世の姿がここに描かれているのである。「ṭakkī hūṃ ja」これが此のタントラの象徴的真言であると云える。

〈キーワード〉 金剛薩埵、三摩耶薩埵

(龍谷大学大学院修了)